

## 長州征伐と徳山藩大坂蔵屋敷の妙見像

— 神仏分離の《夜明け前》神仏習合体制での東奔西走 —

会員 北川 健

### 一 天下の台所大坂での徳山藩の蔵屋敷

徳山藩は大坂に蔵屋敷を保有していた。

大坂の中心地、あの中之島を隔てて土佐堀川に沿った

町並み、その土佐堀二丁目「参考図書1」に間口三〇数間（約七〇坪）を占める蔵屋敷がそれである。天保一三年（一八四二）の「買入」と記録されている。

この土佐堀の一带には長州本藩や島津藩の蔵屋敷なども並んでおり、まさに《天下の台所》、モノ・カネ・ヒトが集まる経済活況の本場であった。「参考図書2」

これら蔵屋敷のようすは、さいわい大阪市立歴史博物館の展示「広島藩浅野家の大坂蔵屋敷」「参考図書3」

や「撰津名所図会」の挿絵「参考図書4」などに見ることができるとができる。

### 二 大坂の蔵屋敷の鎮守に妙見像の勧請

この徳山藩の大坂蔵屋敷は天保年間の取得であるが、それから一〇年を経た嘉永五年（一八五二）——ペリー来航の前年——に蔵屋敷の鎮守として妙見神社を設立することとなり、その勧請式のため下松妙見神社「実景1」の社坊鷲頭寺の別当が出張、上坂、これを執行している。こうした記述は、「徳山」藩史<sup>4</sup>にある。

「嘉永五年（中略）此度大坂蔵屋敷え妙見社御勧請

被仰付候間、罷登候様鶯頭寺え御沙汰相成、則上  
坂御勧請式調之」

妙見像は木像、その大きさは伝わっていない。下松妙  
見神社の『寺社由来』によると、「実物1」

「中尊妙見尊木像 御長壹尺五寸 琳聖太子御情来（前掲）

（中略）

琳聖太子木像 御長九寸五歩

推古天皇像 御長九寸三歩」

とあり、本社中宮に安置する妙見像は丈一尺五寸である  
から、それより大きくはなかったと思われる。

鎮守の社殿景観も分明でないが、中之島を北に越えて  
大坂天満宮の境内（6）図を見ると、境内には天満宮以外の中  
小の神社が数多集積しており、それら小規模級の社殿の  
タイプと似通っていたかとは推測できる。「参考図書5」  
かくて、安政年間刊行の『撰津名所図会大成（7）』には、  
この妙見神社が案内、紹介されている。

「土佐堀二丁目徳山御蔵やしきにあり、鎮守の祠に  
して日本最初北辰妙見尊と称す、嘉永六年子三月

十八日御遷座ありし所也」

これが「日本最初」の妙見尊として下松妙見神社から  
勧請されたものと宣伝されており、それゆえにこそ徳山  
藩もこの下松妙見神社をもつて妙見像を大坂に祀ったこ  
とだと認識してよい。

「然れば靈験殊更に掲焉とて詣人常に間断なく、且  
毎月十八日八門前に夜店あまた出て其賑きこと言

語に絶す」

ともあり、地元大坂庶民の人気を得て繁盛しているさま  
が告げられている。

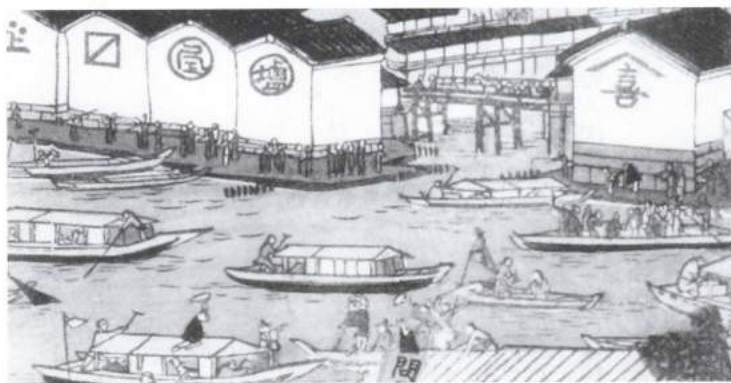
### 三 神仏習合体制下の下松妙見神社

そもそも下松妙見神社は、妙見神を祀る。「実景2」

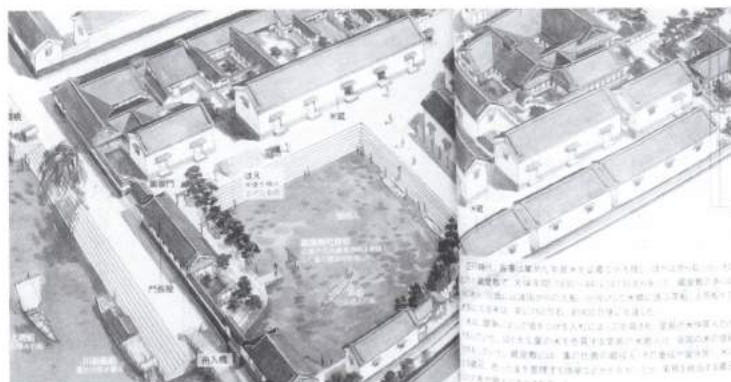
妙見神は「北辰尊星」とも呼び、北極星・北斗七星を  
神格化した神である。古代中国・朝鮮から伝来。仏教で  
は「妙見菩薩」とし、神道のほうでは天地宇宙の主宰主  
であることから「天御中主神」とする。仏神両面をもつ、  
神仏習合をなす存在である。



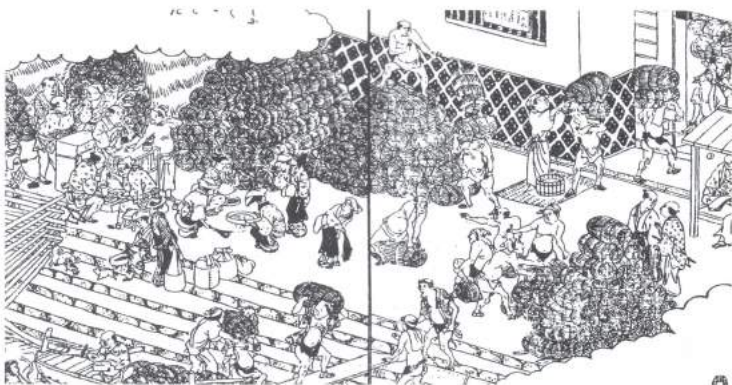
【参考図書 1】大阪の市街地図。北に中之島。南の土佐堀川に沿って左手へ土佐堀 1～3 丁目。(平凡社『日本名所大地図』H 18)



【参考図書 2】河沿いの蔵屋敷群と、河を行き交う船 (部分)。(学習研究社『天下の台所・大阪』H 15)



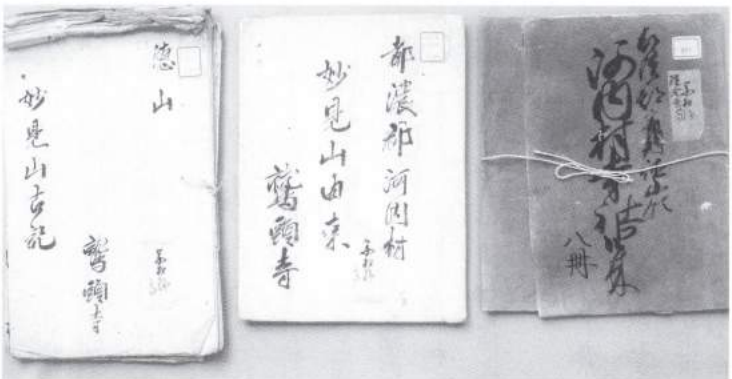
【参考図書 3】大阪市立歴史博物館の展示「広島藩浅野家の大坂蔵屋敷」(部分)。(学習研究社『天下の台所・大阪』H 15)



[参考図書4] 葺屋敷の賑わいの図(部分)。刊行会「棋津名所図会」上巻(T8)。



[実景1] 現在の降松神社の鳥居。古図によれば正面の一段高い所に社坊鷺頭寺が建っていた。



[実物1] 下松妙見神社のいわゆる《寺社由来》。社坊鷺頭寺の別当祖海が提出している。(山口県文書館蔵)



それだけに、同神社には神官のほかには社僧がおり、社坊（神宮寺）を形成する。しかも、その社坊とその長である「別当」が神社を管理運営する権限を占めていた。そうした神仏習合の組織体制が、有数の神社では行われていた時代であった。徳山藩では、

遠石八幡宮（遠石村）……（社坊）五智輪坊（真言宗）

下松妙見神社（河内村）……（社坊）鷲頭寺（真言宗）

庄宮八幡宮（富田村）……（社坊）庄宮寺（真言宗）

松尾八幡宮（生野屋村）……（社坊）多聞院（真言宗）

国津姫大明神（富海村）……（社坊）神祥寺（禪宗）

大井村八幡宮（大井村）……（社坊）大応寺（禪宗）

が、その社坊支配は神仏習合体制にある神社であった。だから、大坂で妙見社を勧請するのに下松妙見神社社坊の別当が出張する、当然の任務があったのである。

#### 四 「日本最初の妙見尊星」という呼び声

この下松妙見神社がそうまで「日本最初」などとしてその名が普及し出したのは、江戸時代中期からである。

宝永五年（一七〇八）、京都十戒寺の住職沢庵が『鎮宅靈符縁起集』<sup>9</sup>「参考図書6」なる書物のなかで、

「推古女帝の御宇に（中略）琳聖太子、吾朝に渡り玉ひ

（中略）渡来の地、肥後国八代郡白木山神宮寺是なり」

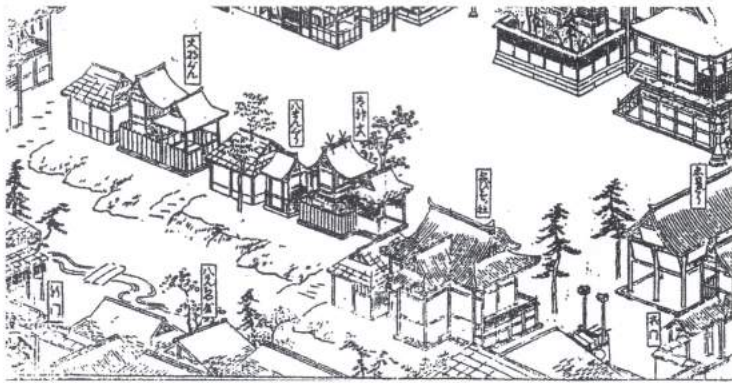
「（琳聖）太子は（中略）推古天皇五年三月二日（中略）周

防国多々良浜に着玉ふ」

と著したこと、やがて近世中期に及んではこれが諸国の妙見系の神社の間で知れ渡り、関係者はいきおい日本最初「日本権与」への関心を募らせ、肥後と周防の有力な妙見系の神社縁起ではそのような起源標榜のブーム競合がヒート。いわば近世の《琳聖太子ルネサンス》とでもいうかの思潮が席卷。肥後の八代妙見神宮、周防の興隆寺、下松の妙見神社で沸騰した<sup>10</sup>。

ここでは、そうした「日本最初」という主張が徳山藩によって大坂の地に届いていたことが見て取れる。

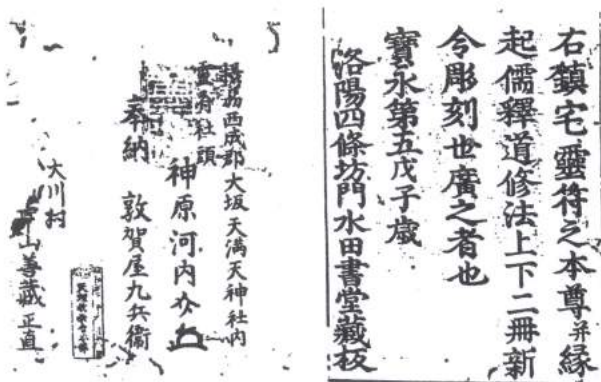
つまり、京都に始まった「日本最初」論が近世中期に西国を折り返し、幕末には大坂にまで及んで一周していたことが、これで跡づけられることになる。



[参考図書 5] 大阪天満宮の境内に見える小社の図（部分）。(同朋社『大阪天満宮史の研究』H 5)



[実景 2] 現在の降松神社の中宮跡に残る楼門。

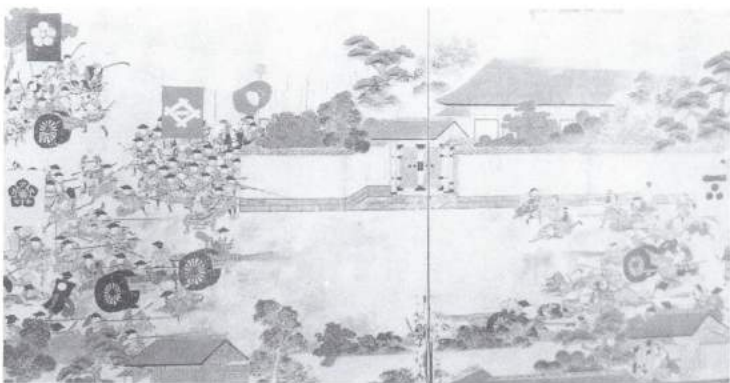


[参考図書 6] 『鎮宅靈符縁起集説』（宝永 5 / 1708）部分。(同朋社『大阪天満宮史の研究』H 5)

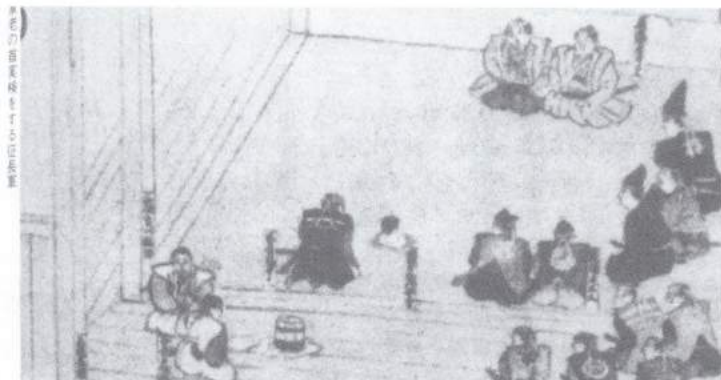




【実景 3】徳山毛利家の祈願所である常禱院。館山に所在。現在無住。



【参考図書 7】禁門の変＝蛤御門の変。交戦の図（部分）。(学習研究社『幕末諸隊録』H 10)



【参考図書 8】長州藩の伏罪・恭順の図（部分）。(日本文芸社『新版幕末維新新聞』H 15)



その徳山藩が早く動いたのは、第一次長州征伐が長州側の謝罪・恭順〔参考図書8〕によって終結、幕軍が大坂撤兵に移った同年の一二月上旬のこと、いち早く事前に大坂に来ていた妙見神社社坊別当(ら)は当の妙見像を運び出し、国元へと担い引揚げたのである<sup>12</sup>。

「元治元年甲子十二月六日大坂御蔵屋敷御勸請之妙見、此度変動ニ付爰許ニ御取下シ当分常禱院え御

預ケ」

思うに、それは幕府への長州藩の恭順体制の先行きに危惧の念が徳山藩側にあつたことを意味する。《今回は事無きを得たが、次回は分からぬぞ》という判断があればこそ、その国元疎開なのである。おそらく、常禱院のメンバーの情勢判断がそれなのであろう。国元に避難した妙見像は、まずは館山の常禱院に預けられたのである<sup>13</sup>。

## 七 倒幕戦争の東上と妙見像の大坂奉還

徳山藩側の予測は当たった。同月の下旬歳末、下関で高杉一派らが決起、翌慶応元年(一八六五)の三月には

藩の恭順派政府を打倒。ために幕府から第二次長州征伐が四月に発令された。

慶応元年 四月 幕府、第二次長州征伐令を発令。

慶応二年 六月 幕長戦争「四境戦争」、開戦。

〃 九月 停戦。幕軍撤退。

慶応三年一〇月 將軍徳川慶喜、「大政奉還」。

慶応四年 一月 鳥羽・伏見の戦い。

〃 二月 「東征軍」、京都を進発。

開戦は翌慶応二年(一八六六)六月。長州藩側ではこれを「四境戦争」という。交戦は三カ月で停戦。幕府側は撤退。

これで幕府政治は失速。翌慶応三年(一八六七)一〇月、將軍慶喜は京都で「大政奉還」に及ぶ。

これに反対する幕府側の大名軍・新選組が翌慶応四年一月に朝廷側の薩摩・長州軍と鳥羽・伏見で衝突〔参考図書9〕するも、朝廷側が勝利。

二月には東征軍が京都を進軍するとともに〔参考図書10〕、京都・大坂には新しい政治秩序が成立。

この事態となるや、六月、鷲頭寺別当は国元疎開の妙見像を再び大坂蔵屋敷へと奉還した。

「慶応四年戊申六月廿二日右尊像又々大坂え御帰り

## 二 相成候

別当ら一行はおそらくは戦勝気分であったかと思う。

世はまさに倒幕戦争進行のさなかであった。

## 八 妙見像一件について認識の構図 A・B・C

以上が徳山藩大坂蔵屋敷妙見像の幕末の疎開、東奔西走の一件である。これをどう見るか。どのような視界と構図で認識するか。それには、次のような視点、見地が可能である、とせねばならぬ。

(A) 徳山藩ひとつ藩限りでの視点なり観点

(B) 本藩を加えた長州藩という視界なり見地

(C) 神道思潮の昂揚という図式なり構図

(D) 倒幕戦線の東上進行の視界なり構図

(E) 維新⇨神仏分離の《急転直下》の局面なり観点

以下、これに照らして見届けておく。

(A) いわゆる藩の《危機対処》《緊急避難措置》としては、大成功である。幕府への《してやったり》と《藩威顕揚》の凱歌にかなう、万々歳、メデタシ、メデタシの出来事である。

(B) だが、本藩では、すでに文久三年（一八六三）の段階で神仏分離を断行している<sup>15</sup>。その視界から見ると徳山藩のこの姿勢は、本藩と大きく遅れている、というより逆行しているサマなのである。

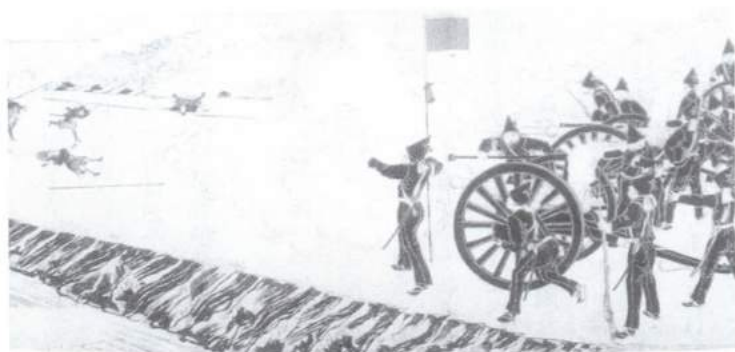
(C) 幕末の神道思潮の昂揚は、妙見神（菩薩）などは「外来神（蕃神）」だという、国学神道の主張を擁しており、徳山藩の妙見像の奉戴・護持の姿勢はそれとは逆向きであった。

## 九 世上は倒幕戦争と廃仏毀釈の始まり

(D) さらに倒幕戦争のさなか、維新政府は神仏分離令を発令している<sup>16</sup>。

明治元年三月 別当・社僧の還俗を命令。

三月 神社から仏像・仏具の取払いを命令。



高瀬川堰の戦い。精進軍の近代兵器の前に、会津藩兵はなす術もなく屍の山を築いた(『錦之

[参考図書 9] 鳥羽・伏見の戦いの図(部分)。(学習研究社『図説新選組史跡紀行』H 15)



[参考図書 10] 東征軍、京都進発の図(部分)。(新人物往来社『天璋院篤姫と幕末動乱』H 19)



[参考図書 11] 廃仏毀釈の図(部分)。(法蔵館『仏教史研究ハンドブック』H 19)

四月 社僧らの還俗、神道への転教を命令。

四月 神職とその家族には仏葬を禁ず。

ために、「戊申」＝明治元年（一八六八）、倒幕戦争の東上に伴って、「排仏毀釈」運動が各地で発生していた。

〔参考図書1〕

『群馬県史』<sup>18</sup> 年表は、倒幕軍の進行と「各地」での「世直し一揆」と「ええじゃないか」「廃仏毀釈」を掲げている。

そんな時勢到来の折、妙見像を担いで意気揚々と大坂くんだりまで押し出すとは、世の歴史の流れとはあたかも『対向車線』、真逆の行進図なのである。

## 一〇 急転直下の徳山での神仏分離の局面

(E) それだけに、徳山藩は情勢として『急転直下』での神仏分離の断行を余儀なくされたことになる。この『急転直下』の歴史転換の局面に直面して、徳山寺社界の大勢を決したコトの当事者がいる。

① 遠石八幡宮の社坊五智輪坊別当

徳山藩での神仏習合体制の頂点にあったが、記録に

よると、「明治元年に退去」<sup>20</sup>とある。彼が政府から

「差止」になるのは明治二年だから、それに先行してみずからによる態度表明であったことが分かる。

② 下松妙見神社の社坊鷲頭寺別当

「徳山で神仏分離をイの一番に叫んだのは彼であった」と後世の鷲頭寺では伝わっている。<sup>22</sup>かれは明治三年の「差止」であるから、これもみずから先立っての宣言であったことになる。

少なくともこの二人は急転直下の徳山藩の寺社界にあって先んじてみずからの態度をもって大勢を決した、と北川は受けとめている――。

兩人とも、先述の常禱院のメンバーである。「第二章」

## 一一 結語――次なる課題へ向けて

わが国の宗教体制は、明治維新によって前後二段に分断されている。

① 神仏習合の体制……………幕藩体制以前

② 神仏分離の体制……………明治維新以降



今回の妙見像疎開の一件は、この二つの体制、まさにその分断の境界線上に神仏分離にギリギリ股がったの一件である。

なれば、さらに次のような究明が俟たれる。

I 徳山藩寺社界での神仏習合の諸相

II 徳山地域での神仏分離の展開模様

註1 『徳山藩史』(『徳山市史料』上/S三九)

2 『天下の台所・大阪』(学習研究社/H一五)

3 『撰津名所図会』(安政)(『浪速叢書』所収)

4 先掲1に同じ。

5 『防長寺社由来』七(S六一)

北川健「徳山藩の改易と下松妙見伝説の封印」(『徳山地方郷土史研究』三七号/H二八)を参照されたい。

6 『大阪天満宮史の研究』二(同朋社/H五)

ちなみに、この大阪天満宮の前身は妙見神社である。

7 『浪速叢書』(名著出版/S五三)所収。

8 『神社台帳』(明治一三)(『徳山市史料』下/S四三)

9 『信仰叢書』(国書刊行会/大正四)所収。

10 目下、数年前から研究中。先掲5北川論文の第二章を参照されたい。

11・12・13・14 先掲1に同じ。

15 北川健「幕末長州藩における神仏分離の展開」(『山口

県文書館研究紀要』七/S五五)

16 圭室文雄「神仏分離令」(『神道史大辞典』H一六)

17 宮崎博生「神道史概説」(おうふう/H一三)

18 『群馬県史』通史編一〇/年表(H四)

19 この大坂屋敷の妙見像も、下松妙見神社のそれも、神仏分離による廃止後の行方は分かっていない。

20 『神社取調書』(明治三)(『徳山市史料』下/S四三)

22 鷲頭寺現住職の杉原孝俊氏の談話(平成二七年一月二五日)による。

23 『徳山藩史』(『徳山市史料』下/S四三)

〔付記〕 本稿は、平成二九年一〇月の研究発表会でのパワーポイント、画像による発表内容を成稿したものである。